

毎日の授業や子どもとの接し方に悩む若い先生たち。  
こんな小さなきっかけから子どもが変わります。

## 教師が育てたように子どもは育つ

京都女子大学教授 吉永 幸司

国語の授業が子どもにとってわかりにくいのは、昨日学んだことが、役立っているという手応えがないことです。成果が何かわからないのです。しかし、手を抜いていると確実に生活は乱れ、人間関係が壊れるという怖さがあるのも事実です。国語はそういう奥が深い教科なのです。

一言で言えば、「教師が育てたように子どもは育つ」のが国語科なのです。教室の子どもの言葉は、教師の国語に対する考え方の鑑でもあるのです。

### 1 「ぼくじゃない」と「ぼくもわるかつたけれど」

子ども同士が諍いをしています。注意をすると、反応に二通りのタイプがあります。

ひとつは、「ごめんなさい。」より先に「ぼくじゃない。」「私だけなぜ注意をするのですか。」と反発する子です。睨みつけるように言う子もいます。

もうひとつは、「ぼくも悪いのだけれど、どうしてこうなったのか聞いてく

ださい。」と、自分の非を前提にして、話を始める子です。

前者のような言い方をする子が多い教室は、教師の指示や注意が次々と出て、考える余裕がなかったり、自分の気持ちを素直に伝える機会が少ない教室です。授業では、指示通りに活動をして利口に見えるのですが、本気で語り合おうというようにはなっていないのです。

後者のような子が多い教室に共通しているのは、子どもの話をしっかりと受け止め、自分の言葉でしっかりと自分を語ることを大事にして授業を進めています。

日常の授業の中で言葉が子どもの生活に表れるのです。

### 2 「紙をください」で注意を受ける子、ほめられる子

生活科の授業で、少し大きめの紙が必要になりました。紙をもらってくるように指示を受け、大きな声で、「教頭先生、紙。」と言いながら職員室へ入っ

てきました。

思わず「教頭先生は紙ではありませんせん。」と言いたくなるような雰囲気でした。ところが、同じ二年生なのに、

「教頭先生、生活科で町のまとめをしています。普通の画用紙より大きい紙が三枚ほしいのですが、どの先生にお願いしたらいいですか。」

と、言う学級もありました。思わず、「丁寧にも。」と言って、上等の紙をあげたくなるような言い方です。

「上手に言えましたね。どこで勉強をしたのですか。」と尋ねました。

「国語の勉強で、先生に教えてもらいました。」

と、得意気に答える子が大きくも見え、眩しくも見えました。「先生に教えてもらいました」が気に入りました。

### 3 「じゃんけんもいいけど話し合いが、もつといい。」

寮生活をしている学生に、掃除の時の役割分担をどんな方法で決めているか聞きました。

「いつも、いつもじゃんけん。公平だから。」

と言うのです。「話し合い」の返事を期待して、

「それぞれ、得意の分野があるので、話し合って相談をして決めているのではないの。」

と聞き返しました。この言葉の意味が通じなかつたのでしょうか、不思議そうにしているのです。

「自分の力や得意な部分、あるいは、仕事量など考えて、『私はここをやる』とか、『このことはあなたにお願いします』というように役割を決める方法もあるのです。」

と説明をしました。「そういう方法もあるのか」というような反応でした。学生にとって意外な提案であったようです。「話し合い」は小学校から授業の主流ですが、身につけていなかったということがわかりました。

子どもたちは何かを決める時、じゃんけんをします。班長を決める時、仕事の分担や係、委員会の役員を決める時など、いつでもです。じゃんけん

もいいけど「話し合い」がもつといいのです。

「話し合い」の仕方を指導するのは国語の時間です。その国語の時間にもじゃんけんが多いのです。発言の順を決めるのもじゃんけん、グループの意見を発表する人を決めるのもじゃんけん。

それは、「グループで話し合い、代表を決めなさい。」という指示だけで済ませていることが多いからです。指示だけでは力は伸びません。具体的に、話し合いの仕方を指導するのです。

「この意見を中心になってまとめたのは、山田さんだから、山田さんに代表をお願いしましょう。」

「わたしは、この前代表をしたので、今度は大川さんを推薦します。」

国語の授業だけでもじゃんけんを決めることはなくなつてほしいものです。「話し合い」のよさを教えておかないと「小学校からずっとじゃんけん決めていました。」「話し合いの仕方を習った記憶はありません。」と、言われそうです。